

震災を乗り越え、新生産拠点の安全衛生活動を推進

セントラル自動車株式会社

工務部 安全衛生管理室室長(衛生工学衛生管理者) **近 泰俊**さん(右)

人事部 福利厚生室主査(産業看護師・専任衛生管理者) **森田いづみ**さん(左)



1950年、トヨタ自動車の東京工場を引き継ぐ形で創業したセントラル自動車(株)。平成23年1月には、宮城県黒川郡大衡村に宮城工場の稼働を開始した。現在は従業員約1,500人をはじめ約2,000人以上が生産を支えている。平成23年7月には、トヨタ自動車の東北復興プロジェクトとして、中京地区、九州北部に続く国内第3の生産拠点を目指す新たな取組みを開始した。

震災により肥満が増えた？ 就業中の禁煙を断行

新工場の稼働開始後、2カ月余りで発生した東日本大震災。宮城・岩手内陸地震の経験を活かした“地震に強い工場づくり”が功を奏し、1人の負傷者も出さず、生産設備の損傷もわずかだった。そのため、大震災から約1カ月後の4月中旬には生産再開に。その模様は、震災からの復興を象徴するものとしてマスコミでも大きく取り上げられた。

事業場の安全衛生管理を担当する近さんと、産業看護師で専任衛生管理者である森田さんも震災後の対応に追われることに。当日、休暇や出張中の従業員や、その家族の安否確認は容易ではなかった。偶然、神奈川の相模原工場に出張中だった森田さんも、宮城へ戻り手段を失い、神奈川から宮城への支援・生活物資の輸送手配などに奔走。「赤ちゃんや小さな子供を抱える従業員も多く、粉ミルクやおむつなどの入手も困難を極める中、愛知のトヨタ本社や相模原工場からの支援は、宮城工場の大きな支えとなりました」(近さん)。

震災の従業員の健康などへの影響について尋ねると、「余震のストレスや睡眠障害で不調を訴える方も多かったです」。また、「食料の入手が困難で、食材にも偏りがあり、3食非常食だとカロリーばかりが高く、5月の定期健康診断では肥満の方が増えました」(森田さん)という。「食べられる時に、いっぱい食べてしまう」という食

習慣にも問題があったようだ。

また、震災の混乱で取組みとしては遅れたが、相模原時代から進めていた「メンタルヘルス推進員」制度をパワーアップ。推進員の勉強会や情報交換会の開催頻度を増やした。しかし、「メンタルヘルス不調の予備軍は増加傾向です」(森田さん)と、まだまだ不安要因はあるようだ。

震災から3カ月ほど経った6月から、通常的安全衛生活動に戻った同社。特に注力するのが受動喫煙の防止だ。喫煙場所を独立させて工場から離すとともに、毎週水曜日の「ノースモークデー」を相模原工場から引き続き実施した。また、このほど「昼休み以外の就業時間中禁煙」を採用。繰り返しの理解促進、啓発活動によって「達成できています」(近さん)とのこと。

また、健康づくりにおいては、相模原工場では通勤者の多くが電車などの公共交通機関を利用していたのに対し、宮城工場では新たな造成地に立地することから、自家用車通勤者が増加。歩く機会が大幅に減ってしまったことが、運動不足につながっているようだ。そのため、歩数や消費カロリーを簡単に算出するためのツール“構内フォーキングマップ”を作成するなど、運動習慣をつくる仕掛けづくりに取り組み中だ。

さらに、従業員の3分の1が単身赴任、3分の1が独身者という構成で、食事の偏りも心配事のひとつ。食堂業者と共同で栄養バランスのよい食事やカロリーを抑えたメニューの提供などのほか、血管年齢や骨密度の測定など従業員一人ひとりの健康管理への啓発活動にも取り組んでいる。

震災で大きな被害を被った東北の地にあって、新たな視点で安全衛生活動や産業保健活動に取り組む同社。地域のけん引役としての期待も寄せられている。